学術随想

生命の木——東と西

土井健司

●連載

創価大学創立二十周年の記念事業の一つとして、シルクロードの発掘調査が実現し、ソ連のウズベク共和国スルハンダリア州の、ダルベルジン・テペで、昨年夏、約四十日間に渡って、共同発掘に参加し得た。

私にとって、夢にまで見続けて来たことが現実になった。本来、歴史に大変な興味を抱いていたし、関西創価高校の敷地の発掘をして以来の出来事であり、大学で中国文学と東洋思想を専攻してより、シルクロードに魅せられてきたからである。しかし、抱いていた夢は、現地の苛酷なまでの気候に、簡単に打ち破られてしまった。

発掘は、表土を十センチも剝がせば、千数百年を遡求し、後期クシャン時代に至る。数々の発掘品を得ることが出来たが、中でも数個の土器片に描かれてあった「木の葉」が「生命の木」の表象であることを知った時、新たなる感動を覚えた。

「木の葉」は二種類あって、一葉でシンプルなのが、大クシャン時代の土器片で、三葉描かれてあるのが、後期クシャン時代のものであるという。土器の質も大変異なり、大クシャンの土器は、焼き方も土質も色も非常に美しいが、後期クシャン時代の土器は、それに比べると極めて粗野という印象を受けた。

出土した土器片に描かれた葉は、アーカンサスの木の葉であるという。今後研究する材料が出来たわけであるが、それよりも、日本の古代にも「生命の木」伝説が存在したし、中国にも、隣国の韓国にもあることを知っていたため、シルクロードを通して伝播したのか、それとも各国々で本来存在した考え方なのか大いに興味を抱いたからである。

日本の「生命の木」伝説については、万葉集に、大伴家持が長歌の中で詠じている。

懸けまくもあやに畏し皇神祖の神の大御代に田道間守常世に渡り八矛持ち参出來し時時じくの香の木の實を畏くも遺したまへれ國も狹に生ひ立ち榮え春されば孫枝萌いつつ霍公鳥鳴く五月には初花を枝に手折りて少女らに裏にも遣りみ白栲の袖にも扱入れ香細しみ置きて枯らしみあゆる實は玉に貫きつつ手に纏きて見れども飽かず秋づけば時雨の雨降りあしひきの山の木末は紅ににほひ散れども橘の成れるその實は直照りに彌見が欲しくみ雪降る冬に到れば霜置けどもその葉も枯れず常磐なすいや榮映えに然れこそ神の御代より宜しなへこの橘を時じくの香の木の實と名づけけらしも(十八—四一一一)

と橘が田道間守によって常世の国から齎らされた木であることを。常世は、古事記・日本書紀等に見られる、古代人が考えた理想郷である。家持の歌を子細に見れば、春には、初花を手折り、夏には小さな果実を紐に通し、秋冬になっても常に枯れない等と、四季を通して橘を愛でている。この歌の背景には、古事記(中巻)の

又天皇、三宅連等の祖、名は多遲摩毛理を常世の國に遣はして、登岐士玖能迦玖の木實を求めしめたまひき。…其の登岐士玖能迦玖木實は、是れ今の橘なり。

との記述によっていると思われる。また同様の記載は、日本書紀(巻六)にも見られる。その他、万葉集には大伴旅人も、

吾妹子が見し鞆の浦のむろの木は常世にあれど見し人そなき(三—四四六)

と詠ずる「むろの木」も、やはり常世から齎らされた神聖な木である。恐らく地域によって異なるのであろうが、樹木信仰の一つであり、中でも常緑樹が中心である点に、日本の古代人の畏敬するものの一端を知り得る。

そしてこうした信仰が、今日なお日本社会に生き続けているのである。交通の障害になっても、〝タタリ〟があるからとその木を切らずに残しておいたり、年始に家の門に置かれる門松も、本来は常磐木に対する信仰より発している。樹木が人間に崇ることなど考えられないが、青々と年中繁る樹木や、大きく太い樹木や高い樹木に神が憑依すると当時の人々に考えられていた。

韓国にも同様の信仰が存在する。サンシン(山神)や部落の守護神をダンサン(堂山)または、ダンサンシン(堂山神)と呼び、多くは巨大な樹木である。そしてクムチュル(禁縄)をまいて祭るのである。我が国の地鎮祭を思い起こせば理解出来る。

橘は、温暖な地に育つ木であり、中国でも、「橘化爲枳」(『周礼』―考工記、総敍)との言葉がある。淮水より北の方に移し植えると、橘は変化して枳(からたち)になるとの意である。南方文学を代表する屈原の『楚辞』九章に、「橘頌」がある。橘をほめたたえる詩である。

后皇ノ嘉樹橘徠リ服シ兮
受ケテ命ヲ不レ遷ラ生ズ南國ニ兮
深固ニシテ難レ徙シ更ニ壹レニス志ヲ兮
綠葉素榮紛トシテ其レ可レシ喜ブ兮
曾枝剡棘シ圓果搏タリ兮
青黃雜糅シ文章爛タリ兮
精色ニシテ内白ク類ズ任道ニ兮
紛縕トシテ宜ク脩ミ姱ニシテ而不レ醜カラ兮

后土と皇帝(天地の神)が生じさせためでたい樹木、土になじみ神の命を受けても他に移らず、南国に生育していると詠じ始める。三十六句から成る詩の冒頭からの一部ではあるが、緑の葉や白い花、果実についても詠じられており、この後、六朝の詩人達の詩にも見られる。同じく屈原の『離騒』には、東方に「扶桑の木」、西方に「若木」があると詠じられてもいる。しかし、北方西安(長安)地方に都した時代には、詠じられなかった樹木であり、気候・風土によって、神聖視された樹木は異なるのである。北方で霊木とされた代表的な木は、梅か桃であろう。果実に呪術的な結実を信じたようである。

西王母の持つ不老長寿の果実は、桃であったし、仏教で説く極楽浄土や、道教の聖地崑崙山も、先の西王母の楽園も共に西極にあった。そしてその西極の地に、生命を育む木や果実があると信じられていたのである。いずれも太陽の沈む西方にその楽園を求めている。太陽の沈む方角は、復活の何かがあると信じられたのであろうか。

こうした考え方は、アジアに発生し、西方に伝えられたのであろうと考証した学者に土居光知博士がいる。博士はシュメルのギルガメシュ伝説やヘーラクレース伝説を引用し、「生命の木」伝説が、シュメル人から始まり、東西に伝播されたことを詳説している。

今ダルベルジン・テペで出土した土器片に描かれた「木の葉」は、どのような意味を持っているのか、なぜ土器に描かれたのか、他に描かれているものは存在するのか。様々な疑問がある。それら疑問の解決は今後に譲るとしても、中国や韓国・日本にも、描かれたものが存在するのかどうか、興味は尽きない。考古学に関しては、全くの門外漢であり、単なる興味に過ぎないが、古代社会における樹木信仰は、洋の東西を問わず、人間の存在した社会に必ず存在する思想であったことは、間違いのない事実であろう。

従って、我が国の古事記や日本書紀に記される田道間守の齋した〝時じくの香の木の実〟が、屈原の言う、扶桑や若木、西王母の楽園の桃や楛榴等と、エデンの園の林檎と大変な関係があると、土居光知博士は述べている。

このように考えると、シルクロードという東と西を結んだ地上の路は、「生命の木」という、復活の思想をも伝播した路でもあった。そしてダルベルジン・テペは、地理的には、印度の思想を東と西へ伝えた分岐点と言うことになり、ここの今後の発掘物は、更に多くのことを物語ってくれるかも知れない。日ソ共同の発掘は、今年の夏も含めて五年間は続く。クシャンの仏教文化の解明が大きな目的ではあるが、私個人にとっては「生命の木」に大いに魅かれるのである。

(どい けんじ・創価大学教授)